

思えば私たち姉妹は——
あの"穴"に生かされていたと思う。

でも今となっては——



「アイナ、そこで何してるの？」

姉のラキが不思議そうに私を呼んだ。
私は振り返りもせず、足元を指差す。

「面白い"穴"見付けた！」

「穴……？」

私たちが普段から鉱石を獲りに来ている山の中腹。
穴はそこに空いていた。

一見したところ何の変哲もない洞穴。
草木に隠れるようにして、口を開いている。
大ききだって大人が何とか入れるほどで、特別大きなものではない。
ラキは不思議そうに私に聞いた。

「別に普通の洞穴だけど？」

「ううん、こっちに来て！」

私はラキの手を引いて、すぐ近くの斜面を駆け下りた。
大人が見れば危ないと思うほどの駆け足。
でも私たちは毎日ここで歩き回っているのだ。
このくらいの斜面は平地と変わらないことを姉も知っている。
そしてやや下った場所にはもう一つの洞穴があった。
こちらは地面ではなく斜面に横向きに空いている。
だが大きさも先程と同じくらいの普通の穴だ。
ラキはまだ何も分からないようで、今度は少し怪訝な表情を浮かべた。

「ねえ、アイナ。さっきから何があるっているの？」

「ちょっと待っててね」

ラキは頭も良く大人っぽいけど、少しだけ気が短いところがある。
私は彼女が痺れを切らす前にと、今度は元来た道を駆け上がった。

「ハアハア……お姉ちゃん！ これを見ててね」

「それって……ただの赤木鉱石じゃない」

鈍く赤く光る石。

石同士を擦り合わせれば、一晩は部屋を薄く照らす見慣れた生活石。

さすがに山の表面には落ちていないものの、鉱石場に行けばいくらでも手に入る珍しくもない鉱

石。

私は斜面の下に小さく見えるラキが見えていることを確認すると、それを足元の穴へと——放り込んだ。

石は吸い込まれるように消えていき、地面についた音も、砕けた音も何も聴こえない。だけど、やや待つとラキが驚いたように何かを拾い上げた。彼女はそれを上に掲げる。

「——これって……どうということ？」

「すごいでしょ？」

ラキが右手に持っているのは私が先程投げ入れた石だ。二つの穴は繋がっている。だが問題はそこではなかった。同じように挙げられた彼女の左手。そこにも全く同じ形の赤木鉱石が存在していた。

『写し穴』

正しい名前は分からない謎の洞窟。それを私たち姉妹はそう名付けた。



姉のラキと妹の私——アイナ。

私たち姉妹は鉱山の麓に住んでいる。

両親はいない。

元々この町の住民でない彼らは、私が生まれて間もなく町を出て行った。

根無し草の旅人である両親にとって、この町で鉱山掘りとして生きていく選択肢は初めからなかったのだ。

町の人々は一時的とはいえ両親に宿を貸してしまったこと——その結果こうして子供が残されたことに多少の罪悪感を覚えたのかも知れない。

結果、ラキが6歳。私が3歳になるまでは最低限の世話をしてくれた。

——だがそこまでだ。

6歳となればどの家の子供も家の手伝いを始める時期。

つまりは働ける歳なのである。

私たちはこの時点で完全な独立を強いられた。

「お姉ちゃん。赤が12個。青が3個集まったよ」

「うん、午前中だけの成果としては悪くないわね」

「ねっ」

「お昼にしましょうか」

「やった！」

この鉱山での鉱石集めは力よりも経験と勘がものを言う。

それというのも、必要な石は決して奥には埋まっていないものの、表面上の見分けが付き辛いのだ。

だから下手な人は闇雲に一带を叩き続けるしかない。

だが場所が分かるようになると、浅く掘り進むだけで簡単に鉱石は出る。

照明になる赤木鉱石。

水を澄ませる青冥鉱石。

重くて高価な紫亀鉱石。

私たちはまだ2年程度の経験しかないが、幸いにも才能があったのだろう。

既にギリギリ暮らしていけるだけの力は備えていた。

……もっとも本当に"ただ暮らしていけるだけ"だ。

今いる家だっていつまでも貸してはくれないだろう。

いずれ自分たちの棲家を得るためにも、貯金はしなくてはいけない。

だがそれはあまりにも遠い夢だった。

——この穴を見つけるまでは。

「今日のご飯は塩おにぎりです」

「えー、塩は結構辛くなっちゃうからやだなあ……」

「これが一番安いから我慢してね」

そういうとラキは手慣れた動きで、おにぎりは紙に包んだ。

そして私はその間に下の穴へと駆け下りる。

「いいよー」

「じゃあ行くわね」

そう言うと、ラキは包んだおにぎりを「えい」と穴に放り込む。

石の時と変わらない静寂。

暗闇は私たちの昼食を飲み込み——

「出てきた！」

やがて穴から吐き出した。

包み紙ごと2個に増えたおにぎりを。

私は早速それを持って姉の元へと走る。

「今度は交代ね」

「はいはい」

そして同じことをラキと交代してもう一度。

ただし今度は2つともだ。

するとおにぎりは倍に増えて出てくる。

ラキが4つのおにぎりを持って帰ってきたところで、いつも通りの昼食だった。

「いただきまーす」

「あ、また1つ目から食べてる！」

「おいしい」

写し穴。

先日私が見つけたこの穴は正に魔法の穴だった。

中に入れた物が2つになって出てくるのだ。

仕組みは分からないけど、とにかくそういうものとしか言えない。

私たちは当然喜んだ。

これがあれば何度も鉱山に行かなくても、いくらでも増やせる。

ご飯だって一度買えばお腹いっぱい食べられるのだ。

だが物事はそこまで甘くはなかった。

「やっぱりこっちのはしおっからーい」

「1つ目から食べるからそうなるのよ」

「だって3つ目はどうやってもまずいもん」

「嫌なことは先に済ませちゃうの」

1つ目、3つ目とは穴に入れた順番だ。

この穴は何でも増やす。

だが増えた側の物はどこか劣るのだ。

例えばおにぎりなら味が落ちる。

鉱石ならば輝きも効果も弱くなる。

見た目はほとんど変わらないが少しずつ劣化する。

また増やしたものを更に増やすと、この場合は更にもう一つ劣化する。

おにぎりAを最高としよう。

穴に入れて出てくるのはおにぎりA(最高)とおにぎりB(やや美味い)だ。

おにぎりBを更に増やすと、次に出るのはおにぎりB(やや美味い)とおにぎりC(不味い)である。

そして不思議なことに一度穴に入れた後のおにぎりA(最高)。

これをもう一度入れた場合も増えて出てくるのはおにぎりC(不味い)なのだ。

どうやら一度増やしたものは"何かが"減ってしまうらしい。

おにぎりCは不味いけど、何とか食べられる。

だがそれ以上のおにぎりDともなれば、とても食べ物とは呼べない。

つまり1個のおにぎりから増やせるのは、良質が1つに粗悪が2つが限度なのである。

もっともそれでも日夜食べる物に困る私たちには天の恵みに他ならなかった。

「少しは貯金たまったかな」

「ふふ、アイナも私に似てせっかちなね。まだまだよ」

「まだまだかー」

「でも少しずつだけけど、楽になって来てる」

粗悪な鉱石は安く買ったたかれる。

それでも収入は一気に増えた。

食費だって燃料費だって半分以下になった。

「さて、午後も頑張りましょうか」

「うん！」

生活はまだまだ苦しい。
今日も夜遅くまで私たちは働き続けた。
山道は暗く足元は覚束ない。
私は姉の手をぎゅっと握りしめる。
転ばないようにと力任せに握った手を、彼女は痛くないように優しく包み込んだ。
優しく、そして暖かい手。

「明日は漬けたお野菜も持って行こうね」

「本当？ やった！」

そう、少しずつだが——良くなっているのだ。



ある日、紫亀鉱石が出た。

「すごいねお姉ちゃん！」

「うん！ この大きさなら高く売れそうね」

例の如く私たちは写し穴でそれを4つに増やし、そのまま町に売りに行く。
買取のおじさんも随分驚いていた。

「おおー！ これだけの上物は珍しいな」

「ね！ すごいでしょ」

「こら、机に乗り出さない。行儀が悪いわよ」

「はっは、興奮するのも分かるがね。しかも4つもあると来た」

「ちょっと質は落ちてしまうんですが……」

「構わんよ。しかし妙だな……」

「……………何か？」

「中の気泡や結晶の形がどれもやけに似ているような……」

「同じところから発掘しましたからね。当然でしょう」

「うーむ」

店の人はそれ以上追及しなかった。
別に不思議なだけで困ったことではないからだ。

「バレなくて良かったね」

「悪い事してるわけじゃないんだけどね」

売りに出す増やした鉱石は、わざわざ叩いて形を変えていた。
同じ物を2つも出せば当然怪しまれるからだ。
怪しまれれば当然理由を聞かれる。
いずれ私たち以外にも穴が知られてしまうだろう。

『穴が皆に知られちゃうと困るの？』

『ええ、きっとあれは貧しい私たちだけが使うための御恵みだから』

『ふーん』

姉はそう言っていた。

実際知られたらどうなるのか私には想像がつかない。

でもラキには分かるのだろう。

それを告げた時の彼女の顔はどこか陰があったのを覚えている。

そして今、普段目にしないような大金を持って、家へと向かうラキの顔もその時と同じだった。

「—————これだけ」

「……？」

「——これだけ稼げるなら」

—————
——それから間もなくの事だ。

ラキは鉱山に行かずに、度々町に出るようになった。

そしてその度に重そうな荷物を抱えて、帰ってくるのだ。

理由を聞いてみても。

「アイナ、早く二人の家を持とうね」

返ってくるのはそればかり。

鉱山に行く回数も日に日に減っていく。

それなのに—————

「今日は鳥雑炊よ」

食卓は日増しに豊かになる。

私は喜んだか？

いや、不気味でしかなかった。

泣いて喜んでいて肉の味も、何だかあの日のおにぎり以上に味気ないものだった。

「お姉ちゃん最近なにしてるの？」

「……別に何も？」

姉——ラキの後を追おう。

私はそう決心した。



姉を見送った後、私はすぐにその背を追った。

彼女はそんなこと想定していないのだろう。

あるいは別のことを考えていて気付かないのかもしれない。

とにかく尾行は簡単だった。

「あれ？ ここって……」

ラキが一人で向かっていたのは鉱石を扱う店だった。

普段から近場で取れない物があれば買いに来る。
そんな通いなれた場所である。
ならば余計秘密にする必要はないはずだ。
だが買い物する様子を覗き込んだところで違和感に気付く。
彼女が受け取っていたのは、使うこともない高いばかりの宝石だったからだ。
私は何とか耳を立てて会話を聞き取る。

「ちゃんと期限までに返してくださいね」

「いつも返してるでしょう？」

「いやぁ……でも怪しんでる従業員も多くて」

どうやらあれらは買ったのではなく、一時的に借りているようだ。
その時点で私はある可能性に気付いてしまった。
だが今は声をかけることは出来ない。
たくさんの宝石を抱えて山へと登る彼女をただ見続けた。

——私はかつてラキがしていた話を思い出していた。

『アイナ。あの穴はすごく有りがたいものだけど、頼りすぎではいけないと思うの』

——私はどうしてと聞いた。
ラキはやや悩んだ後に言う。

『うーん、例えばご飯は食べると元気が出るけど無くなっちゃうでしょ？ つまりそれが正しいことで、あのただ増えるだけの穴はおかしいものだと思うの』

——そして真面目な顔で私の目を見た。

『だから使いすぎると——どこかでその分のツケがくる。きっとね』

ラキと私はいつの間にか見慣れた場所まで来ていた。
罪も憧憬も希望も絶望も。
あらゆる感情を飲み込む深淵へ続く穴だ。

姉はおもむろに取り出した宝石を穴へと投げ入れていった。

後ろめたさを残した複雑な表情で？
……
違う——彼女は笑っていたのだ。

私にはその顔が堪らなく醜くて——

「やめて！ お姉ちゃん！！」

————トン

決して強い力ではなかった。
だが無抵抗な彼女の背にぶつかったと同時に——

——姉は穴へと落ちていった。



「今日も 鉱石 いっぱいだー」

夕暮れ時の山の上で私は唄う。
手には赤と青の鉱石の山。
まだラキには及ばないものの、一人でもこれだけ取れるようにはなったのだ。
自然と口ずさみたくもなるだろう。
それらを背負うためにまとめていると、誰かが歩いてやってきた。
それが誰なのかは顔をあげて確認するまでもない。

「わっ、いっぱい取れたねアイナ」

「えへへ」

姉——ラキは嬉しそうに笑った。
彼女の手にも沢山の収穫物が握られている。

「どこも痛めなかったみたいで良かったー」

「だから言ったでしょ。大丈夫だっテ」

ラキが穴に落ちたとき。
私は数々の嫌な想像をしてしまった。
もしかしたらもう二度と会えないのではとも思った。
だが姉が消えてからしばらくして。
出口から呻き声のような、何かが地面に打ち付けられる音のような。
そんな不吉な音がした後に彼女はゆっくりと姿を現したのだ。
泣きそうになりながら、私はラキに抱きついた。
そして怪我がないかを聞く。
彼女の体に血がついていたからだ。
どこかに体をぶつけたのだろうか。
だがラキは『大丈夫』と一言だけ呟く。
『これは私の血じゃないカラ』と。
意味は分からなかったが、とにかく無事で良かった。
そうして日常が戻ってきたのだ。

「さあ、今日はもう帰りましょうか」

「うん」

写し穴は今使っていない。

思えば私たち姉妹はあの穴に生かされていたと思う。

でも今となっては、生かされていたのではなく——ただただ動かされていたのではと考えるようになった。

まるで悪魔の口に食べ物を運ぶように。

ラキも同じ考えだったのだろう。

彼女はあの日を境に穴に近付くのを禁止した。

でもそれは正しいことなのだろう。

たまに性急なときはあっても、姉は基本的に正しいのだから。

暗い夜の帰り道。

私は思わずラキの手を握った。

勿論彼女もいつも通りに握り返してくれる。

「————ツ」

「どうかしタ？」

「ううん、何でもないよ」

何故か——その握り方が以前より多少粗雑で痛くとも。

気にするほどでもない——些細な問題だった。

(終)